

新生「気象利用研究会」を遺して

——元田雄四郎先生逝く——

平成元年3月8日、九州大学農学部教授元田雄四郎先生は肝臓ガンのため逝去された。62歳であった。

元田先生は昭和27年3月に九州大学農学部農業工学科を卒業された。その後、農業気象学教室で研究に従事する傍ら、九州電力株式会社の嘱託として発電用水資源の問題に取り組みされた。昭和31年には同社に正式に入られ、現場を体験された後、昭和36年からは同社総合研究所において水文気象にかかわる多くの研究に携わられた。昭和42年の同研究所研究報告として出版された「降雨と流出に関する研究」はそれらをまとめたもので、この研究によって昭和43年6月に九州大学から農学博士の学位を授与された。

昭和43年からは日本気象協会、昭和47年には原子力安全研究協会に出向され、気象情報や気象資源の有効利用に対する関心をいやが上にも高められ、それが後年の気象利用研究会発足に対する執念になったものと推察される。

昭和48年4月には母校九州大学に迎えられ、農業気象学講座の助教授として研究を進める傍ら後輩の指導にあたることになった。坂上務教授が退官された後、昭和60年12月には教授に就任され、大学内にとどまらず、学会や各種委員として産業界・官界においても指導的な役割を果たされた。

元田先生のお人柄は、極めてダンディズムにこだわられるかと思うと非常に正直であり、われわれ後輩はその大きな落差にとまどうこともあった。先生は若い時に現場生活が長かったため基礎的な勉強ができなかったことを悔いていると正直に告白され、われわれには基礎の勉強を怠ることがないよう注意された。反面、「為になるかならないか」を重要な判断基準と考えられており、先生の当面の大きな課題は「為になる農業気象学」の構築であった。

日本農業が危機に直面している現在、役に立つ農業気象学を模索するのは厳しい作業である。日本の農業気象学界が日本の現実を直視して環境調節の色合いを濃くしつつある中で、元田先生も一時期気持がそちらに傾いたこともあったように思われる。しかし、それでは農業気象学は日本農業と運命を共にすることになる。



農業だけにこだわる必要はない。気象情報や気象資源、あるいは気象学の知識そのものの利用は多くの分野で期待されており、学問としても取り上げるに十分な意義を持つテーマである。元田先生はそのように考えられて気象利用研究会の設立を決意された。日本農業気象学会九州支部会員の協力を得て気象利用研究会が発足したのは昨年の11月21日であった。長崎で行われた設立総会で初代会長として挨拶されたのが、公式的な場における元田先生の最後のお姿となった。

その頃から体調は急激に悪化し、12月上旬に入院、年末年始には自宅に帰られ、大学にも3日間ほど顔を見せられたが、その最後の日、1月10日の夜半に救急車で再入院され、その後病院を出られることはなかった。

気象学会の中で元田先生が果たされた役割について、筆者は十分には承知していない。しかし、気象学会と農業気象学会をつなぐ必ずしも太くない糸の芯になっておられたであろうことは想像できる。残されたわれわれは、遺された気象利用研究会の場を活用して、その役割を受け継いで行かなければならないと決意を新たにしている。

元田先生の四十九日の法要の日、気象利用研究会の会員数は170名を超えたことが確認された。先生の御霊前にご報告し、御冥福をお祈り申し上げた次第である。

(九州大学農学部 小林哲夫)